



186人の少年たちはみな、まず 朗読することになりました

この絵本はアイヌのお父さんとその息子の対話でできています。アイヌの民話を元にしたお話で、この世でいちばん偉いのは何か——おおかみなのか、氷なのか、お日さまなのか、人間なのか、何なのか、子どもの質問にお父さんが答える形で話が進みます。

この対話を少年たちに朗読してもらいました。小道具として、アイヌ風の鉢巻きやはんとん、付けひげも用意しました。教官に促されてトップバッターを務めてくれた少年2人は緊張してカチコチ。聞いている方も2人に感情移入してハラハラ。だから2人が最後まで読み切ると、「よかった！ すごい！」と教官も少年も一斉に拍手喝采です。演じた2人はきょとんとしていました。本を読んだだけで、こんなにみんなが心からの拍手をしてくれる。そんな経験は彼らは生まれて初めてなのです。そして全員の表情が変わってきました。

後に教官に伺うと、刑務所の少年たちは、子どもの頃からろくに学校に行けず、学芸会にも参加したことがない子が大半だそうで

す。親から罵倒され、否定され続けてきた子も多い。そんな彼らが、言葉を声に出すことで、みんなに真剣に耳を傾けてもらえた。それで彼らの中に、自己肯定感が芽生え、教室の雰囲気さがらりと変わったのです。こんなにうまく行くなんて——ビギナーズラックかしらとも思いました。でも、私はその後9年間、186人の少年たちと向き合いましたが、この授業をして一人として変わらない子はいませんでした。

最初の授業はこの朗読を順繰りにやつてもらうだけ。いかつい少年が、子ども役をやりたい、と志願してくれたことがありました。お父さん役は、きゃしゃで細身の少年。逆じゃないかなと思いつつ演じてもらうと、強面こわもての少年は大柄な体を小さくしてかわいらしい声を出し、きゃしゃな少年は精一杯低い太い声を出すのです。みんなあつけにとられました。でもすごくよかったです。きゃしゃな少年はお父さん役を堂々と演じ切ったことで自信が生まれたのか、晴れ晴れとしていました。強面の少年は——授業後、刑務所の教官が私に言いま

